

悠久の京を訪ねて Part III Vol.9



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
 京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
 私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

近代治水事業の幕開け — 木津川河床遺跡の発掘調査 —

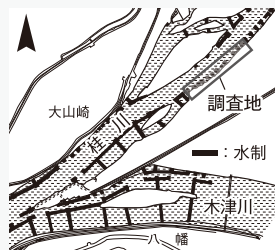
■ 木津川、桂川の水制と護岸

明治時代初期、日本の近代化を目的に多くの外国人が招聘されましたが、このころ西洋の治水の技術も伝わりました。

明治8(1875)年、彼らは土砂の流入・堆積のため船が接岸できなくなっていた大阪港の整備を目的に、上流からの土砂流入をくい止めるための砂防施設を木津川の支流不動川につくりました(木津川市：府指定文化財不動川砂防施設)。

彼ら外国人技術者の一人に我が国の近代治水事業の指導に尽力したオランダ人技術者ヨハネス・デ・レイケがいました。

同年、淀川本流で土砂を水流によって沖に流すため、流路を制御し、その流速により水深を深くする計画がたてられました。これは川の両岸から水制と呼ばれる突堤状の張り出し



木津川・桂川合流部の水制護岸の設計図
 (協力：淀川資料館)

を造り、左図のように向かい合う水制の間が幅120m、深さ1.5mの安定した水路となるものです。これによって、河川を流れる水の勢いが制御され、流路が固定されたため、大阪天満橋から京都伏見まで、蒸気船の運行が可能になりました。

木津川河床遺跡



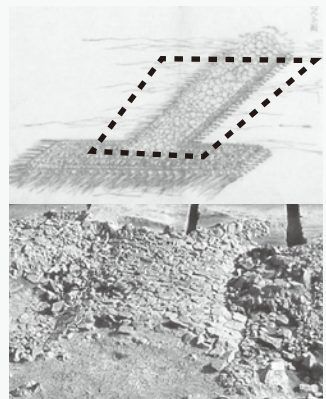
■ 石積みと粗朶沈床工を用いた 水制と護岸の発見

平成23年から2か年にわたって調査した木津川河床遺跡では、約450mにわたり大規模な石積みが発見され、デ・レイケ達が施工した水制と護岸であることがわかりました。

その表面は角礫で覆われ、水制の中央部は礫と粘土が交互に積み重ねられ、その上に石が石畳状に貼られていました。水制の先端は、木の枝などを重ねて筏状のものを作り、水没させて石などを置き基礎にした粗朶沈床工と呼ばれる工法で造られています。

この工法は、近くで採取できる川の砂礫、木の枝などを用い、山を荒らすことなく施工できるものです。

木津川河床遺跡の調査は近代治水技術の実態を示す貴重な成果になりました。



木津川河床遺跡の水制の検出状況と絵図面
 (淀川資料館蔵)